

## 裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題としてみてください。会話が広がります。(たまに写真も!?)

令和7年5月28日(水)

# みんなの居場所

## 運動会の学びを活かす

「ポイントで雨に降られた運動会は、保護者の皆様を始め、多くの方々に支えられ、成功裏に終わっていただき大変嬉しく思います。」

さて、この時期には運動会が終わり、目標が無くなってしまつて、少し心に穴が空いてしまった感覚に陥ることがあります。そうならないために何が必要かという、学んだことを次のステップへ活かしていくことです。運動会の勝ち負けだけに拘り過ぎて「負け」を継続すると、やる気が出なくなったり、次の目標を見出せなくなったり、その事が原因でルールを守れなくなったりすることがあります。いわゆる燃え尽き症候群と呼ばれるものです。

私はこれまでの取組を見ていて、子ども達の大きな成長を感じています。特に5・6年生は期待値以上に成果を上げてくれたと思います。勝ち負けに関係なく、お金では買えない貴重な経験だったはずです。

閉会式の時、6年生児童の目に満足感を見出しました。一人一人が達成感を感じていたようです。これまでの取組が「帳面消し」ではなく、本気だったことの現れたと思います。勝つことも目標の一つですが、負けて得るものも大きいのです。「運動会で学んだものを、これからの生活に活かす」このことは、今後の生活や自分の言動をコントロールしていく視点になります。6年生はこの運動会で集団をまとめることの大切さや難しさ、やり遂げることで得られる達成感や充実感も味わったことでしょう。それを良き伝統として下級生に伝えるという思いがあります。

## 【雑感】人の失敗を笑う人は…

経験則を述べてみたい。「人の失敗を笑う者は、自分の夢や目標を達成することができない。」断言はしないが、多くの場面で言っている。理由は二つである。

ある子が一生懸命な中に、思わず失敗したとしよう。通常は「ドンマイ、次頑張ろう!」とか「大丈夫、君ならできる!」と励ましの言葉を掛ける子が多い。しかし、たまに失敗を笑い、馬鹿にする子がいる。そういう子は当然笑われたり馬鹿にされたりするのが嫌いで、失敗はしない。なぜ失敗しないのか?それは失敗しそうなことには挑戦しないからだ。挑戦しないから失敗もない。だから、人が挑戦して失敗する姿を見てもそれに共感することができず、馬鹿にする。当然のことながら、そこには何の学びも無く、成長もない。つまり、嫌なことから逃げてばかりで立ちほだかる壁に挑んでいくようなチャレンジ精神がないのだ。こういった子は高学年になると孤立してしまうことが多いように感じる。仲間を作りたいのだが、精神的な成熟につれて挑戦することが大切」とか「一生懸命のことが良し」とか「努力の継続の大切さ」に気が付き始めると、「失敗を笑う」とことが人の道から外れていることに気付くからである。思春期の入り口において、精神的成熟のため背伸びをすることがあるが、当然、心身の未熟さから失敗することが多い。それを繰り返しながら精神的に成長し、人の心にも寄り添ってことができるようになる。何度か言いますが、挑戦しない者は失敗もしない成長もしない。挑戦する者は何度も失敗を繰り返して、失敗の中から学び、次の挑戦に活かしていくことができる。その繰り返しが真摯に謙虚に、そして愚直に繰り返すことができる者が、最終的には夢や目標を手に入れることができるようになる気がしている。

## シリーズ「自分を語る」#13

5年生の時の出来事で印象深いものも一つあります。それは怪我です。学校の中で「かくれたほ」をしていた時のことです。よく覚えてみれば、怪我して当然のシチュエーションでした。「いじわるっ!」だからバチが当たったのです。

ある日の昼休み、友達と一緒「かくれたほ」をしていたところになり、その場所を考えていました。その日は曇り、今にも雨が降り始めるそうで外に出るのは少々ためらわれました。そこでみんなの意見は当然のことく校舎内ということとまとまり、かくれたほ開始。麻生田小学校は新設校でしたので、木造から鉄筋コンクリート製に替わり、多くの扉もアルミや鉄に替わっていました。校舎内のかくれんぼですが、隠れる場所って大体決まっています。ルールとしてトイレに隠れるのはダメというところになり、みんな扉の陰とかに隠れていました。私も同じように隠れるのですが、鬼に見つかりそうになつてまた別の場所へ移動していくこと。今でいう「逃走中」のようなかんじでした。中々のスリルがあります。意識はすべて鬼の動きに集中です。体中にアドレナリンが充満している感じです。こんなことをやっている何が起こっている訳がありません。

私は非常階段の鉄の扉の陰に隠れていました。当然のことながら鬼の動きを確認しつつの行動です。扉の窓から顔を上げれば見つかる可能性があり、私は誰かが扉を開ける度に蝶番(ちようつがい)：扉を開け閉めする時の扉を固定してある部分)の隙間から鬼の様子を見ていました。そして何度目の扉の開閉の時、あまに鬼に集中するあまり、自分の左手中指が蝶番の隙間、建物と扉の隙間に入ってしまった。私は当然それに気づいてはいません。その時、一緒に隠れていた友達に、鬼が近づいて来るのに気づき、扉を開けてしまったのです。

「ミッ……」 (たしかこんな音が出ました。私のイメージです。)

指先に激痛が走り、私は「いたたたたたたたたた」北斗の拳のパンシロウのように叫んでいました。周りの友達は何が起こっているのか分からず、状況確認に少し時間がかかったようです。扉の仕組みが分からなかった友達に、逆方向に扉を動かしてこの原理で激痛は更に増すばかり。私は言葉を失いました。顔面蒼白で私は友達に「は、ん、たういせに……」と手を絞りました。やっこのことで引き抜いた中指は、無残にも爪が縦に半分に曲がっていました。友達か急いで保健室に知らせに行ってくれましたが、担任の先生は「まだ運動がやっただか、やれやれ……」という具合。保健の先生が「これはレントゲンを撮っておいた方がよいね。」と仰って、私はそのまま保健の先生と病院へ直行です。(幸いにも骨折はしていませんでしたが、数日後爪が黒くなって剥がれてしまいました。)

学校では校舎内でかくれたほをしていたメンバーはこびりこびり叱られています。私もけが人なのに誰からもいじわりの声はかけられず、静かに「自業自得」という言葉を視線でうつつけられるのであります。後日談として、当時の担任の先生と保健の先生は結婚されました。そして、同窓会の際には私をきめたところのかくれんぼのメンバーは担任の先生と夫婦に頭が上がりません。(つひ)